

## エスニック集団の社会理論

倉田和四生

はじめに

- (1) エスニック集団とイデオロギー
- (2) 地位・所得の格差と隔離
- (3) コミュニティの制度と組織
- (4) エスニック集団の社会理論
- (5) 集団凝集性を規定する諸要因  
むすび——エスニック集団の諸特性

### はじめに

アメリカ合衆国やカナダは多数の移民を受入れ、そのエネルギーを吸収しながら、社会発展の活力に転化させて来た。また移民は苛酷な社会的・経済的な状況のなかで生きなければならないため、一般市民が敬遠するような職務をも喜んで引受けて働くところから、ホスト社会にとってもきわめて有難い存在である。

ところでホスト社会では、社会の緊張を除き安定を保つため、市民は出来るだけ同質であることが望ましいと考えられるところから、受入れた移民を一日も早くホスト社会に融合させようと長期間にわたって同化の試みがなされて来た。他方、移民も母国に住み続けることを断念して移住したわけであるから、1日も早く、その国に同化融合することを念願すると思われる。

ところが現実には、これとは逆に、「アメリカナイゼーション」のような同化政策の推進にもかかわらず、さほど効果が上がらず、移民は各自のエスニック・コミュニティを形成し、これが長期間にわたって存続している。アメリカは「人種のるつぼ」であるとの見方は楽観論にすぎるとはいかないかという疑問が強まったのは1950年代の後半であった。グレイザーとモイニハンの『人種のるつぼを超えて』(1963年)とゴードンの『Assimila-

*tion in American Life*』(1964年)はその記念碑的業績である。グレイザーとモイニハンはニューヨーク市の中に、なかなか融合しないままで存続するエスニック集団を数多く指摘している。またゴードンはこのような事実をもとにして、同化過程を詳細に分析しながら「文化的同化」と「構造的同化」を区別するとともに、その一類型として「文化多元主義」についても論及している。

アメリカ合衆国の1950年代後半から60年代は黒人の市民権運動が活発に展開された時期であったから、これらの思潮が、他のエスニック集団にも影響を与えた。そこで多数のエスニック集団もそれぞれ自己主張を始め、次第に「文化多元主義」が有力な思潮となった。

カナダでは1971年にトゥルドゥー首相がすべてのエスニシティに対してマルチ・カルチュアリズムの政策をとることを宣言した。カナダにはケベック問題が存在し、二言語が公用語とされているが、単にフランス系だけでなく、すべてのエスニック集団が各々の文化的遺産を尊重し、保持することが公認されたわけである。いまや文化多元主義の時代に入ったといえる。

本稿ではアメリカ合衆国とカナダを対象として、まずイデオロギーの変遷をたどり、格差と隔離の実態、さらにエスニック・コミュニティの組織をみたあとで、エスニック集団に関する既存の社会理論を検討し、これを一つの図式に結合してみよう。最後に凝集性の規定要因についても論じたい。

### (1) エスニック集団とイデオロギー

移民が始まって以来、20世紀の中頃に到るまでの長い期間にわたって、エスニック集団に対する

支配的なイデオロギーは「同化主義」であった。

### 1) 同化主義

カナダにおける同化主義はカナダ社会に最もふさわしい国民を選択的に受入れるという政策を遂行した。W. ロイエー内閣の内務相シフトンはこの政策を積極的に実施した人物である<sup>1)</sup>。その際、同化しやすい国として選ばれたのは「北ヨーロッパ」の国々であった。

同化政策としては、まず望ましくない人達が移民として入って来ないように排除し、同化し易い人々を選択的に受入れることであるが、ここで同化し易いものとは、カナダにとって類似した習慣や理想を持った人々のことであった。したがってそれは具体的にはフランス、ベルギー、オランダ、スイス、ドイツ、デンマーク、ノールウェー、スウェーデン、アイスランドなどであり、「北ヨーロッパ」の国々が好まれたわけである<sup>2)</sup>。

カナダの今日の新自由党の前身となる社会主義政党の創始者である J. S. ウッズワースも同化政策を推奨し、その実施計画を提示しているが、その中で彼は、東洋系は同化しにくいと述べている。そしてさらに同化政策を効果的に推進していくためには、エスニック・コミュニティの分散が必要であると説いている<sup>3)</sup>。これが同化主義者の典型的な考えであろう。

アメリカ合衆国ではテディ・ルーズベルトやウッドロー・ウィルソンといった大統領も同化主義者であったことはよく知られている<sup>4)</sup>。

ミルトン・ゴードンは同化主義には二つの種類が区別されるとして、一つは「アングロ系への同調」であり、他はアメリカを「人種のるつぼ」とみる考えである。

彼によると「アングロ系への同調」とは、アメリカ社会の中核をなすアングロサクソン系の行動や価値体系に同調し、移民の文化を完全に放棄することであるのに対して<sup>5)</sup>、「人種のるつぼ」とは

アングロサクソン系を含め、すべての移民が一定の期間アメリカに生活するうちに、次第に融合して、新しいアメリカ人が生まれてくるというものである<sup>6)</sup>。そこから生まれるものは単なる文化的混合物ではなく、独特のタイプのアメリカ人である。

### 2) 文化多元主義

1950年代と60年代を通じて展開されたアメリカにおける黒人の市民権運動と関連しながら、多くのエスニック集団の中から文化多元主義のイデオロギーが高まりを見せて来た。カナダではこのような文化多元主義のイデオロギーは英国系とフランス系の葛藤の高まった時期に声高に主張されるようになる。そしてその際、英国系とフランス系以外のエスニック集団もまた好機を逃さず、自からの存在を主張し始めたわけである。

ゴードンによるとアメリカの文化多元主義はエスニック集団がアメリカ社会への政治的、経済的統合の過程で、自からの集団生活や文化の重要な部分を後々まで保持しようとする考えである<sup>7)</sup>。

このように文化多元主義はエスニック集団の存続を容認するわけであるが、そのことは全体としての社会にどのような影響を与えるのであろうか。

カレンはエスニック集団への所属には三つの機能があると述べている。その一つは集団参加による個人の情緒的満足が得られることである。第二は、エスニック集団の存続によって多様な文化が認められることを通して、真に民主主義が確立することである。さらに第三は、様々なエスニック集団が相互作用を営むことによってお互いに啓発され、創造的な社会的経験を積むこととなり、高次の文化を産み出すから、エスニック集団の存続は社会全体の発展に貢献するのである<sup>8)</sup>。

### 3) 文化多元主義への反論

このような文化多元主義のイデオロギーに対し

1) Brown, R. C. and R. Cook, *Canada 1896-1921*, 1974, P. 9.

2) Brown, R. C. and R. Cook, *Canada 1896-1921*, 1974, P. 9.

3) Woodsworth, J. S., *Stranger Within Our Gates. Or: Coming Canadians*, 1972, P. 234.

4) M. Gordon, *Assimilation in American Life*, 1964, PP. 121-2.

5) M. Gordon, *Assimilation in American Life*, 1964, PP. 84-114.

6) M. Gordon, *Assimilation in American Life*, 1964, PP. 115-131

7) M. Gordon, *Assimilation in American Life*, 1964, pp. 132-159.

8) Horace M. Kallen, "Democracy Versus the Melting Pot," *The Nation*, February 18 and 25, 1915.

ては、反対の声も上がっている。カナダの場合には、まずアングロサクソン系の市民は、文化多元主義によって自らの権益が犯されるのではないかと警戒している。明らかな反対がしにくいだけに、逆に陰にこもった反感が生み出される可能性がある。またフランス系カナダ人にとっては、文化多元主義の政策が、カナダの資源をすべてのマイノリティに分散させる傾向があるところから手離しには賛成出来ない。またそのことを口実にして、返ってフランス系カナダ人の地位をアングロ系のレベルにまで高める努力を政府が怠るのではないかと、疑心暗鬼に陥っている状態である。

アメリカ合衆国においても文化多元主義は社会の分裂を招くものであるとして反対する論者もいる。オーランド・パターソンは、文化多元主義の支持者の発言は、排他的で、一方的な論議が多く、自からのエスニックの美德を誇示すること、不満を表明することだけに終始していると批判している<sup>9)</sup>。

#### 4) カナダの現況

しかしながら1960年代以降、文化多元主義は次第に社会に受入れられ同調者をふやしている。

カナダでは連邦政府やいくつかの州や都市で文化多元主義の政策が遂行されている。トゥルドゥー首相は1971年の下院で政府の公式声明として文化多元主義を表明した。それはカナダ人の文化的自由を保護するために最も適した手段である。それは四つの方法で実施される。

その一つは、援助の必要な文化集団の支援に努める。その二、カナダ社会への参加の障害となるものを取り除く。第三に、カナダの国の統合に役立てるため、文化集団相互の出会いと交流を促進する。第四に移民がカナダによりよく参加出来るように公用語の修得を促進する、というものである<sup>10)</sup>。

近年ではアメリカでもカナダでもエスニック系の祭典が増え、活況を呈するようになって来た。カナダのトロントでは大がかりなエスニック「キャラバン」における熱狂的な音楽や踊り、西イン

ド諸島出身の「カリバナ」など多様なエスニックの祭りが催されている。市の新聞はエスニックの近隣を特集し、学校でもエスニックの母国語を教えたり、エスニック集団の代表がコミュニティ組織で奉仕を行なったり、スーパーマーケットでもエスニック・コーナーが設けられ人気を呼んでいる。生活全体が文化多元主義を指向するようになって来た。

以上のところから明らかなように、アメリカ合衆国においてもカナダにおいても、かつての同化主義のイデオロギーは次第に衰え、いまやお互いの差異を尊重し合う文化多元主義が時代の潮流になって来た。

## (2) 地位・所得の格差と隔離

移民達が形成するエスニック集団の特性を規定する条件は三つに整理される。その一つは垂直的な格差であり、二は水平的な隔離、三は機会の不均等——差別である。その実体をカナダの調査データに基づいてみてみよう。

### 1) 垂直的隔離 ① 地位の格差

ポーターは1931年、1951年、1961年のカナダの国勢調査を用いてエスニシティと職業の地位を検討した結果、カナダにはエスニックによる不平等が存続しており、エスニック集団は移住したときに就いた職業に長くとどまる傾向があることを指摘し、これに「垂直的モザイク」と名づけた<sup>11)</sup>。

同様に1961年のセンサスを用いてブリシェンやレイノルド達も同じ用に検証をおこなった結果、ユダヤ系はイギリス系よりも高い地位にあるが、フランス系、ドイツ系などはイギリス系より低く、ウクライナ系とイタリア系は最低であることを報告している<sup>12)</sup>。

しかしカナダにおいても日時の経過とともにエスニック系の地位の格差は縮小する傾向にある。

1971年のデータによると10年間に地位の格差が縮小し平均に近づきつつあるが、イタリア系は依然として低い。例外はアジア系(中国)がイギリ

9) O. Patterson, *Ethnic Chauvinism: The Reactionary Impulse*, 1977, p. 152.

10) Canada. Parliament, *House of Commons Debates, Third Session, 28 Parliament, volume 8*, October 8. Ottawa: Queen's Printer, 1971.

11) J. Porter, *The Vertical Mosaic: An Analysis of Social Class and Power in Canada*, 1965.

12) Canada. Royal Commission on Bilingualism and Biculturalism, 1969a Report. Vol. 3, *The Work World*.

表1 男性労働者の地位と所得の指標 (1961年、カナダ)

エスニック集団	仕事の地位の 指標、全体 (イギリス系=1.000)	所得の指標 (全集団=100.0)	
		全体	非農業従事者
ユダヤ系	1.312	166.9	168.2
イギリス系	1.000	109.8	109.9
その他*	0.933	98.2	94.1
フランス系	0.925	85.8	87.7
ドイツ系	0.913	103.1	95.3
ウクライナ系	0.892	86.8	93.5
イタリア系	0.892	81.0	82.0

(出所) J. G. Reitz, *The Survival of Ethnic Groups*, 1980, p. 152.

\*このリストに示されていないエスニック集団

表2 カナダにおける職業的地位の指標\* (1961, 1971)

エスニック集団	1961	1971
ユダヤ系	2.42	1.92
イギリス系	1.28	1.15
スカンディナヴィア系	.91	.87
アジア系	.90	1.19
ドイツ系	.85	.87
ポーランド系	.83	.86
オランダ系	.82	.84
他のヨーロッパ系**	.80	.79
フランス系	.79	.89
ウクライナ系	.78	.84
イタリア系	.47	.57
土着の人々	.15	.41

(出所) J. G. Reitz, *The Survival of Ethnic Groups*, 1980, p. 152.

\* 注意：各年とも、各エスニック集団ごとに、仕事の地位の平均得点が計算されている。1961年および1971年の国勢調査のために、各集団で比較しうる仕事の地位の測度がブリシェンによって造られた(ブリシェン、1970年：ブリシェンとマックロバーツ、1976年)。これらの仕事の地位の得点から、指標の値はそれぞれの集団ごとに計算された。そして、その指標の値は、その年のエスニック集団の相対的な位置を示している。一般に、指標の値は高い仕事の地位を獲得する相対的な可能性を示していると考えてもよいだろう。指標の1.00は、高い地位の仕事を獲得することができる平均的な可能性を示している。

\*\*このリストに示されているエスニック集団には入らないヨーロッパに出身地をもつエスニック集団。

表3 平均的仕事の地位および平均所得\* (労働者のみ)\*\*

(WN, 000 ; N)

地位 所得	エスニック系の出身地				全 体 エータ
	ヨーロッパ系			中国系	
	北	東	南		
平均的仕事の地位	45.4 (259 ; 515)	46.0 (186 ; 443)	36.7 (357 ; 458)	47.0 (35 ; 102)	41.9 (837 ; 1518)
平均所得	\$12,600 (228 ; 448)	\$12,000 (150 ; 364)	\$10,900 (311 ; 397)	\$11,900 (30 ; 84)	\$11,700 (720 ; 1293)

(出所) J. G. Reitz, *The Survival of Ethnic Groups*, 1980, p. 153.

\* 家族の全年間所得

\*\*労働者：加重数 N=847,000；非加重数 N=1530

ス系と並ぶところまで上昇していることである。

1973年にライツ等によって実施されたカナダの五つの都市調査のデータをプリシエン尺度で測定すると、中国系が最高で東ヨーロッパと北ヨーロッパが続き南ヨーロッパが最低となっている。

② 所得の格差

1973年のデータによると、所得については北ヨーロッパ系が最高で、ついで東ヨーロッパ、さらに中国系で、最低が南ヨーロッパ系である。

地位と所得を併せてみると、「北ヨーロッパと東ヨーロッパ」はいずれも似かよっている。しかし中国系は仕事の地位は最高であるにもかかわらず所得は北・東ヨーロッパより低い。また「南ヨーロッパ」は地位、所得ともに他に比べかなり低くなっている。

ところでエスニック集団についてみると仕事の地位の差と比べると、所得の差はそれほど大きくない。エスニック集団の成員の仕事の地位はかなりの格差があるが、所得の場合には相対的にみて平等に近づいている。

さてこのような仕事にかかわる不平等によって集団の凝集力を説明できるであろうか。「東ヨーロッパ」は仕事の地位も所得も北ヨーロッパに近づいて来たから、東ヨーロッパの比較的強い凝集

力はこれによっては説明出来ない。また中国系も仕事の地位が最高であるにもかかわらず凝集力が強いことの説明は困難である。

2) 仕事の隔離

経済制度のなかのエスニック集団の位置は仕事の水平的隔離すなわち特定の職業への偏りによっても示される。

エスニック集団の職場で働く物の割合が最も多いのは南ヨーロッパで、次いで中国系においても多くなっている。さらにこれを仕事の地位別にみると、南ヨーロッパ系も中国系もともに地位の低いところに集中している。ここでは教育程度の低い人が筋肉労働に従事している。また所得の高低でみると、南ヨーロッパと中国には所得の低いところへの集中がみられる。これらのデータからみると、南ヨーロッパ系は、仕事の地位が低く、所得の低い人々がエスニック集団の職場（3分の1以上の人の間でエスニック言語が、話されている）でより多く働いていることが知られる。

地位の高い中産階級エスニックにも仕事の隔離は存在している。しかし経済制度の中にはエスニック集団によって形成され自足性が高く、潜在力をもった「飛び地」(enclaves)が存在している。イタリア系が建築業界に占める勢力や中国系の専

表4 エスニック集団の職場で働いている者の割合（エスニックの出身地別、仕事の地位別、所得別）

(WN, 000 ; N)

地位 所得	エスニックの出身地				全 体	
	ヨーロッパ系			中国系		
	北	東	南			
A. 全労働者	9.5 (261 ; 511)	11.7 (182 ; 435)	40.7 (332 ; 427)	31.8 (35 ; 99)	23.7 (811 ; 1472)	
B. 仕事の地位別	高い	7.2 (140 ; 275)	6.2 (103 ; 241)	22.9 (91 ; 122)	24.1 (20 ; 53)	11.9 (354 ; 691)
	低い	12.7 (115 ; 231)	19.1 (78 ; 189)	47.6 (241 ; 304)	45.7 (14 ; 45)	33.6 (448 ; 769)
C. 所得別	高い	9.7 (115 ; 192)	5.1 (67 ; 162)	36.1 (104 ; 108)	25.2 (14 ; 36)	18.5 (300 ; 498)
	低い	9.0 (110 ; 248)	19.8 (80 ; 191)	43.0 (186 ; 260)	34.4 (16 ; 46)	28.4 (391 ; 745)

(出所) J. G. Reitz, *The Survival of Ethnic Groups*, 1980, p. 155.

門職などがその例である。これは経済的に孤立しているのではなく、上昇移動の可能性をもつものである。このようにエスニック集団の中にはより高い「飛び地」に移動する者がいる。ブラロックはこれを「仲介マイノリティ」と名づけている<sup>13)</sup>。その例としてポーナチッチはヨーロッパにおけるユダヤ人、東南アジアにおける中国華僑、東アフリカにおけるアジア系などの集団をあげている<sup>14)</sup>。

要するに南ヨーロッパ系と中国系にとって仕事の隔離はそれらの集団の凝集力の強さを規定する要因となっている。南ヨーロッパ系についていえば、建設業の地位の低さや建設業に隔離されている事実は、凝集力の強さの原因となっている。中国系の場合には地位は高くなっているが、仕事が隔離されているので凝集力は高くなっているといえよう。

ただ東ヨーロッパ系の凝集力に関しては北ヨーロッパと接近しているので断定的なことは言えな

い。

### 3) 機会の不平等 ① 地位の機会

先に述べたようにポーターによって、カナダはエスニック集団の垂直的モザイクとして固定された、上昇移動のとぼしい社会と判断された。しかしその後の調査によると上昇移動の可能性はいく分高まって来たとされているが、なお不均等な差別のある社会である。

ところでその社会に差別的な扱いが残されているかどうかは、昇進の機会があり、高い地位の仕事に付けるかどうかによって判断される。エスニック集団の成員の上昇移動の障害になるものは、採用や昇進の機会に要求される「資格」を持ち合せないという事である。資格を条件として昇進がなされる場合、同じルールで判定がなされるので一見差別的な扱いとは見えないが、資格はそれ自身差別的な性格を持つ可能性がある。例えば採用の際に「カナダでの経験」を要求する場合があるが、エスニック集団のメンバーにはその経験がな

表5 エスニックの出身地別の平均的仕事の地位と平均所得（教育レベルを考慮したとき）

(WN, 000; N)

教育 所得	エスニックの出身地				全 体	ベータ
	ヨーロッパ系			中国系		
	北	東	南			
平均的教育年数	11.4 (265 ; 519)	11.6 (187 ; 446)	8.0 (357 ; 458)	13.3 (35 ; 101)	10.1 (844 ; 1524)	
平均的仕事の地位： 高い教育（10年以上）	48.3 (190 ; 381)	49.4 (141 ; 337)	44.5 (124 ; 176)	50.0 (26 ; 77)	57.7 (483 ; 971)	
低い教育（9年以下）	37.1 (69 ; 133)	35.2 (44 ; 104)	32.5 (231 ; 218)	39.1 (8 ; 23)	34.4 (352 ; 541)	
教育年数を修正した総合性	43.0 (259 ; 514)	43.0 (185 ; 441)	40.6 (356 ; 457)	41.7 (34 ; 100)	41.9 (835 ; 1512)	0.09
平均所得： 高い教育（10年以上）	\$12,900 (173 ; 337)	\$12,700 (115 ; 277)	\$11,500 (110 ; 115)	\$12,700 (24 ; 65)	\$12,500 (421 ; 834)	
低い教育（9年以下）	\$11,400 (54 ; 110)	\$10,100 (35 ; 86)	\$10,600 (201 ; 241)	\$9,000 (6 ; 18)	\$10,600 (297 ; 455)	
教育年数と仕事の地位 を修正した総合的な値	\$12,300 (222 ; 444)	\$11,500 (149 ; 359)	\$11,700 (310 ; 395)	\$11,500 (29 ; 82)	\$11,800 (710 ; 1280)	0.07

(出所) J. G. Reitz, *The Survival of Ethnic Groups*, 1980, p. 159.

13) H. M. Blalock Jr., *Toward a Theory of Minority-Group Relations*, 1967.

14) E. Bonacich, "A theory of middle-man minorities", *American Sociological Review* 38, 1973, PP. 583-594.

い事が多いと考えるなら、この条件はエスニック集団の成員を排除する一つの方式と見なすことが出来る。このような制度による差別は「制度化された差別」と言える<sup>15)</sup>。

地位の高い仕事に就くための資格を得るには高度の訓練が要求されるので、高い教育を受けることが成功のカギになる。仕事の地位と教育年数の相関関係は強い。

しかし採用や昇進の際の「教育」の要求も場合によっては制度的差別になりかねないことがある。仕事の実績をあげるのに高い教育が必要でないにもかかわらず、採用の際に教育が過度に重視されている。このことがエスニック集団に対する差別を助長している。

ライツはレイノルド達がエスニック集団の場合、学歴と仕事の地位の差には関連があると指摘している点に注目している<sup>16)</sup>。学歴はユダヤ系が最高で、イギリス系がこれにつき、北ヨーロッパ系と東ヨーロッパ系は、フランス系と同じレベルで、イタリア系は最低である。ライツ等の調査でも、エスニック集団成員の仕事の地位の差と教育レベルは密接に関連している。高い仕事の地位をもつ中国系、東ヨーロッパ系、北ヨーロッパ系は教育レベルにおいても高く、教育レベルの低い南ヨーロッパ系は仕事の地位も最も低い。ただ中国系は教育レベルがきわめて高い割には地位はそれほどではない。これは中国がより高い地位につく機会を締め出されているからである。

## ② 所得の機会

所得の機会は仕事の地位の機会とは区別して論じることが出来る。高い地位の仕事についている人はより多くの所得を得る傾向があるが、必ずしも常にそうとは断言できないからである。ライツによると、仕事の機会と所得には強い相関( $r = -0.34$ )はないと言う。これからみても所得と仕事の地位の相関は弱く、個別に変化しているといえよう。たとえばギリシャ系の医師は地位が高いが、稼ぐ所得は限られている。

北ヨーロッパ系と東ヨーロッパ系の所得格差は500ドルであるが、仕事の地位や教育の差に影響を受けているから、それを加味して修正すると、800ドルになる。このことは東ヨーロッパ系が低い所得機会しか得ていないことを暗示している<sup>17)</sup>。これに反して、南ヨーロッパ系は北との所得格差は1,700ドルであるが、教育と地位と修正すると500ドルと小さくなる<sup>18)</sup>。したがって所得機会の点では東ヨーロッパ系が最悪であるといえよう。

北ヨーロッパ系は仕事の地位の機会も所得機会もともに高く、高い地位についており一貫している。南ヨーロッパ系は仕事の地位は最も低く、地位の機会も少ないが、所得の機会は最低ではない。東ヨーロッパ系は中間で仕事の機会は中位で、所得機会は低い。中国系は高い地位についているが、所得機会も仕事の機会も低い。

## ③ 階級移動の機会

ウィリーによると、仕事の隔離は集団成員を弧立させて経済的な選択の可能性を制限することによって不平等性を強めることになる。そこでエスニック集団の仕事の隔離は上昇移動を困難にする「エスニックの移動の罟」を生み出す危険性がある。隔離された職場を選択すると、その選択から容易に抜け出すことが出来なくなる<sup>19)</sup>。

ところがこの見解とは逆にヒューズとヒューズは、新しく移住してきた人によるエスニックの事業が新しい経済の機会を提供して、中産階級が形成され、多くの成員が上昇移動することがあると指摘する。ヒューズはエスニックの中産階級は移住者へのサービスの供給が専門化することによって始まったと述べている<sup>20)</sup>。

また教育程度の低いマイノリティ集団の成員にとって、マイノリティの職場は所得の機会の点からみても非常に魅力的なのである。そしてマイノリティの職場は教育程度の低い人々を上昇移動させる牽引車としての役割を果している。表6に示されているように、マイノリティ集団が優勢者の

15) J. G. Reitz, *The Survival of Ethnic Groups*, 1980, P. 157.

16) *Ibid.*, P. 158.

17) *Ibid.*, P. 160.

18) *Ibid.*, P. 160.

19) N. Wiley, "The ethnic mobility trap and stratification theory" *Social Problems*, 15, 1967, PP. 147-159.

20) E. C. Hughes and H. M. Hughes, *Where Peoples Meet: Racial and Ethnic Frontiers*, 1952, P. 87.

表6 エスニック集団の職場別にみた平均的仕事の地位及び平均所得（教育のレベルを考慮したとき） (WN, 000; N)

	職 場		全 体	エータ ベータ
	優越者の集団	マイノリティ集団		
平均的仕事の地位	44.1 (608; 1187)	35.4 (192; 268)	42.0 (800; 1455)	
高い教育（10年以上）	48.2 (419; 855)	43.3 (51; 84)	47.6 (470; 939)	
低い教育（9年以下）	35.1 (190; 332)	32.5 (141; 184)	34.0 (330; 516)	
教育年数を 修正した総合的な値	42.4 (608; 1187)	40.6 (192; 268)	42.0 (800; 1455)	0.06
平均所得	\$12,100 (524; 1019)	\$10,700 (167; 220)	\$11,800 (690; 1239)	0.11
高い教育（10年以上）	\$12,700 (366; 736)	\$10,500 (43; 69)	\$12,500 (409; 805)	
低い教育（9年以下）	\$10,700 (158; 283)	\$10,700 (122; 151)	\$10,700 (281; 434)	
教育年数と仕事の地位 を修正した総合的な値	\$11,900 (524; 1019)	\$11,400 (166; 220)	\$11,800 (690; 1239)	0.04

(出所) J. G. Reitz, *The Survival of Ethnic Groups*, 1980, p. 163.

環境で働いている場合には、教育程度の低さはは彼等の仕事の地位を13ポイント下げ、所得を2000ドルも下げる。ところがマイノリティの職場で働いている場合には教育程度の低さは仕事の地位を11ポイント下げるが、所得は逆に200ドル増加している。

要約すると、北ヨーロッパ系と東ヨーロッパ系は仕事の機会の点で類似しているが、違いは教育程度による所得格差である。

南ヨーロッパ系は仕事の地位も所得も教育も低くまた隔離されている。ただ教養が低い割には比較的所得が高い。中国系は高い教育を受け、仕事の地位も高く、かなり高い所得を受け取っているが、高い教育に相応しい所得を受けていない。

### (3) コミュニティの制度と組織

次にエスニック・コミュニティの内部の生活構造について検討してみよう。

移民は文化の同一性の故に結びつき共同生活を営む傾向があるが、それを強めるのはホスト社会の社会的偏見と差別行為である。エスニック・コミュニティは偏見や差別に対処するため、ますます

結びつきを強める。外的条件がコミュニティに影響を与え、内部構造を生み出す契機となるからである。

#### 1) 内部組織の形成

移民はみづからの文化を持って移住し、活動を営むが、厳しい条件のなかで生きるためには、収入を得る為の職業に就くとともに、移民の生活欲求を充足させるのに必要な組織をつくり、宗教活動やさまざまな文化活動を行なう。

##### ① 生業とサービス産業

移民はまず生業を探し、これを確保しなければならない。多くは先輩のつてを探して職を得るか、同業の先輩指導者の配下として結びつき集団を形づくる。戦前、カナダ・バンクーバー周辺の日系人についていえば、漁業、農業、山林材木業、製材業などがあつた。

また次第にエスニックの人口が増加すると、そのメンバーを顧客として各種のサービス業が始まる。ルーミング・ハウス、食品雑貨店、食堂、時計屋、靴屋、理髪店、運送業、ホテル業、洋裁店、クリーニング店などがそれである。

##### ② 宗教団体

厳しい条件のなかで生きる移民にとって、なに



よりもまず心の支えとなるものが必要である。また誕生や死亡などの儀礼もなくてはならないものである。そこで宗教は最初から移民の生活には必須のものとなる。カナダの日系移民の場合にも「仏教会」は最初から存在した。移民の社会においては「宗教」は母国における場合以上に重要であり比重が重い。これがエスニック・コミュニティの統合の中心をなしている。

### ③ 自治団体

偏見と差別が日常的に行われている社会で、少人数のエスニック・メンバーが連携をとり合って相互扶助的な生活をしたり、近隣に住む人が交流をもっているような場合、自治団体が形成される。例えば「カナダ日本人会」といったものが生まれる。これは、本来、親睦団体であるが、対外的にはカナダ日系人を代表とするものとなり、やがて内部を統制する機能を果たすようになる。

### ④ コミュニケーション・メディア

多人数の人が協同して生活しているため、コミュニケーション・メディアが生まれる。エスニック・コミュニティには例外なくコミュニケーション・メディアが生まれ、情報を伝達している。かつてはラジオ・新聞（日刊や週刊）・雑誌・パンフレットであったが、今日ではテレビの果たす役割が大きい。

### ⑤ 母国語学校

母国の文化の伝達手段である母国語を保持することは移民のアイデンティティの保持の為に必要である。そこでエスニック・コミュニティにはいずれも母国語を次世代の子弟に教える学校を持っている。これもまたエスニック集団にとっては極めて重要な機能である。

### ⑥ 文化団体・サークル

移民は母国の伝統文化を保持し活動する。そのため各種の団体やサークルが結成される。たとえば日系カナダ人の場合にはお茶、お花、囲碁、将棋、舞踊、書道、太鼓、俳句などのサークルが結成され活発に活動している。これらの活動は独自になされることもあるが、宗教団体、日本語学校、自治団体のバックアップによってなされること

が多い。

以上、六つの組織について述べたが、これらは個別になされるのではなく、緊密に関連し合っている。

組織が一度結成されると母体であるエスニック・コミュニティを持続させる傾向を生み出す。何故なら組織は社会的関心を充たし、社会的機会を生み出すからである。組織は伝統的な信念を強化することによって「社会的な慣性」の傾向をつくり出す。

### 2) 組織の慣性傾向

ロバート・ミッチェルは組織の中の個人は自己の地位を維持するため、組織の永続化をはかる傾向があることを指摘した<sup>21)</sup>。組織の永続化が自己目的となる。政府の官僚制にも同じ傾向がある。組織は、一度、作られると、個人は当初の目的とは別に、組織そのものを永続化させることによって自己を防衛する。

このような組織にひそむ慣性の傾向はエスニック・コミュニティの組織にも当てはまる。当初の経済的逆境あるいは文化的類似にもとづいて強められるエスニック・コミュニティの凝集力は組織の成立によって存続し強化されていく。

組織の慣性傾向に関する仮説は、集団凝集力の基盤が主に経済的なものか、文化的なものかについては、直接、答えるものではないが、慣性傾向を考慮すると、現在関係ないように見える場合でも、間接的に関係する要因があることが推察される。例えば、いまでは経済的な絆をもたないあるエスニックの中産階級がエスニックに強い愛着心を持ち続けているのは、かつて経済的な機能を担っていた組織が慣性によって持続しているということも有り得るからである。

### 3) 制度の完結性

ブレトンエスニック・コミュニティの構造で重要なことは組織の多様性であると主張している。コミュニティの中に様々な組織が存在すれば、成員は欲求のほとんどすべてを充足することが可能となる。移民の隔離されたコミュニティは大抵そのような完結した世界である。ブレトン

21) R. Michels, *Political Parties: A Sociological Study of the Oligarchical Tendencies of Modern Democracy*, 1962.

は移民のコミュニティのなかで制度がすべて整っていることを「制度の完結性」と呼んでいる<sup>22)</sup>。移民は制度的に完結したコミュニティの中で全生活を送ることが出来る。そこで移民にとって制度の完結性は、コミュニティを保持する上で、組織や参加者の数よりも重要である。

エスニックの制度は二つの仕方である年月を経た移住者に影響を与える。まずその一つは、制度的完結性を備えたエスニック・コミュニティの場合には、非公式のネットワークによって、制度に参加していない人も結び付けることが出来る。この非公式なネットワークによって制度に参加していない人を制度に結びつけ、次にエスニック集団への帰属意識を高める。自分はエスニック・コミュニティのメンバーではないがエスニック集団のメンバーである友人を持つようになる。これによってコミュニティの「潜在的成員」——集団と相

互作用しているが、帰属意識はない——を動員することになる。

第2は、制度的完結性をもつエスニック・コミュニティにおいて、組織の指導者は新規の参加者を補充することに努める。その際、主な対象となるのは、「名目的成員」——エスニック集団に帰属意識はもっているが、まだエスニック集団と相互作用をしていない人——である。

このように二つの経路をたどってコミュニティのメンバーに影響を与えるわけである。

ところで完結した制度という場合、そこにはどのような制度が含まれているのか。ライツ等の調査で取上げられている制度は、「教会」、「社交クラブ」、「新聞」、「学校」、「ラジオ放送局」、「八百屋」、「医療制度」、「職場」、「近隣」の九つである<sup>23)</sup>。最も加入者の多い制度は南ヨーロッパと中国系のなかに見られる。九つの制度がどれも参加者を動員

表7 エスニック・コミュニティの制度への参加

(WN, 000 ; N)

制度	エスニック起源別参加率			
	エスニック起源			中国系
	ヨーロッパ系			
	北ヨーロッパ系	東ヨーロッパ系	南ヨーロッパ系	
1. エスニックの社交クラブ	8.2 (417; 798)	9.5 (288; 687)	7.9 (525; 635)	13.9 (57; 250)
2. エスニック教会	21.6 (407; 799)	40.5 (284; 675)	57.9 (512; 626)	21.4 (58; 151)
3. エスニック新聞	16.8 (449; 891)	21.1 (306; 745)	24.2 (526; 638)	33.6 (58; 151)
4. エスニック放送局	14.2 (450; 893)	16.1 (307; 746)	36.6 (528; 640)	16.6 (57; 150)
5. エスニック近隣	1.7 (423; 836)	4.2 (299; 716)	27.3 (516; 624)	17.8 (55; 143)
6. エスニックの学校 (両親用)	8.1 (252; 509)	28.2 (169; 687)	24.5 (307; 635)	24.7 (24; 150)
7. エスニックの八百屋	4.7 (447; 887)	7.8 (301; 733)	44.9 (507; 616)	36.9 (57; 149)
8. エスニックの医療サービス	7.4 (447; 885)	14.6 (301; 734)	34.1 (541; 623)	37.8 (57; 149)
9. エスニックの職場	6.6 (445; 883)	13.9 (299; 728)	30.8 (498; 604)	34.3 (56; 147)

(出所) J. G. Reitz, *The Survival of Ethnic Groups*, p. 222.

22) R. Breton, "Institutional completeness of ethnic communities and the personal relation of immigrants", *American Journal of Sociology* 70, 2, 1964, PP. 193-205.

23) J. G. Reitz, *The Survival of Ethnic Groups*, 1980, PP. 219-225.

している。東ヨーロッパ系の集団においては六つの制度がいくらか人を集めているが、なかでも文化的制度の参加が重要で、経済的制度への参加はやや少ない。さらに北ヨーロッパの場合にはわずかに3個の制度が機能しており、それはいずれも文化的な制度である。

エスニック・コミュニティはこのように内部に制度を発展させ、組織を結成することによって成員の相互作用を頻繁に行い、凝集性を高める。

#### (4) エスニック集団の社会理論

アメリカ合衆国は移民によって形成された国であるが、ことに19世紀末から20世紀にかけて膨大な数の移民がアメリカに流入し、エスニック・コミュニティを形成した。そこでこれらのコミュニティに対して社会的な視点からも種々な研究がなされ、業績が蓄積されて来た。

##### 1) シカゴ学派のエスニック集団の研究

シカゴ学派はシカゴ市を社会調査の実験室としてとらえ、その中に存在するエスニック・コミュニティの研究を行った。そこで彼等はエスニック集団の存続にも強い関心を抱いていた。

シカゴ学派がまず最初に生み出したエスニック集団に関する経験的な研究業績はトーマスとズナニエッキの『ポーランドの農民』(1920年)である。トーマスはエスニック集団の「経済的基礎」を重視している。彼等は経済的基礎がなければ、エスニック集団は凝集性を失ってしまうと考えている。ポーランド人にとってコミュニティの経済的基礎は成員相互の生命保険と医療保険であった<sup>24)</sup>。文化的類似性だけでは、エスニック集団を維持することは出来ないと考えている。

次にパークは『人種と文化』(1950年)の中で提唱した「人種関係サイクル」が知られている。サイクルは接触、競争、応化、同化へと進み不可逆的である。移民は最初は競争能力が弱いので社会の底辺に追いやられるが、子孫は教育を受けて階梯を登り、最終的には一般の市民に同化する<sup>25)</sup>。

シカゴ学派は集団形成における経済的基礎の重要性を強調するため、近代産業社会においてはエスニック集団は時間の経過とともに解体する傾向をもっている。その理由は近代産業社会の経済システムにおいてはどのような集団も傑出した経済的地位を長く維持することは出来ないで、集団形成の経済的基礎が失われるからである。同化はさけることができない近代産業社会の要請である。そこで産業社会ではどのエスニック集団も同化し解体する傾向にある。

##### 2) 機能主義的見解

パーソンズをリーダーとする機能主義の理論家もまたエスニック集団への関心を向けている。彼等はエスニック集団の現象をより一般的な概念を用いて説明している。なぜエスニック集団が上昇移動するかという問いに対して、機能主義者は上昇移動によって産業社会のシステムがよりよく機能するからだとして説明している。また上昇移動が同化という結果をもたらすのは、上昇移動によってエスニック集団が機能を喪失するからであると考ええる。

カー等は機能要件モデルを用いて産業社会の分析を行い、ここでは「アチーブメントの原理」を用いて運営することが最も適格的であり、人種や宗教、国籍のような「アスクリプションの原理」によって運営することは不適合であると主張した。そこで産業社会の進行にともなってエスニック集団は解体に向う傾向がある<sup>26)</sup>。

したがって機能主義的説明は表現をやや変えているが、実質的にはシカゴ学派の見解とはほぼ同じものである。

ところがこのような見解には重大な疑問がなげかけられている。産業組織は本当に業績主義を普遍的に追求しているのか。それは蔓延するコネや特殊な利益の保護を覆いかくすための偽善的な願望にすぎないのではないかという疑問である。

##### 3) エスニック集団が存続する根拠

産業社会にはエスニック集団は適合しないため、やがて機能を失なって解体に向い、ホスト社

24) W. I. Thomas, and F. Znaniecki, *The Polish Peasant in Europe and America*, 1920, P. 106.

25) R. E. Park, *Race and Culture* 1950, P. 150.

26) C. Kerr, J. T. Dunlop, F. H. Harbison and C. A. Myers, *Industrialism and Industrial Man: The Problems of Labor and Management in Economic Growth*, 1960, P. 35.

会に同化するであろうという、シカゴ学派や機能主義者の想定にもかかわらず、現実にはエスニック集団は存続し、1960年代以降、むしろエスニック集団の復活が話題とされるようになった。このような時代の変化のなかで、エスニック集団の存続の根拠が研究の対象とされるようになった。

### ① エスニック集団の潜在的機能

この問題を解明する際にまず最初に重要な手がかりになるのはマートンの「潜在的機能」の概念である。彼は政治的マシーンという腐敗した政治組織が何故存続するかを検証した結果、それが果している機能を発見し、これに潜在的機能と名づけた。社会構造はそれが仮え望ましくないとされるものであっても潜在的機能を果しているかぎり存続しつづけることになる<sup>27)</sup>。

### ② アスクリプションの原理の必要性

このような考え方に立って、メイヒューはエスニック集団が何故存続するかを考察した。彼によると、アチーブメントの原理を完璧に運営することは難しい。能力判定の基準をいかなる場合にも明確に示すことが出来るのか、もし出来ない場合にはどう対処するか。

このような複雑な状況の下では、たとえそれが最善の指導ではなくても、アスクリプションの原理に依拠して事態に対処せざるを得ないのだとメイヒューは論じている<sup>28)</sup>。

コーエンによると近代的産業の中にエスニックに類似する集団が存在している。イギリスのロンドンの近代産業のセンターであるシティにはエスニック集団に類似した集団が存在することを示している。この集団は文化的類似性を形成するために訓練され排他的な地位集団から補充される。彼等のほとんどはパブリック・スクール出身者から補充されるのである<sup>29)</sup>。

このように経済的地位に関する必要条件が、以前には存在していなかった場所にエスニック集団

に類似した集団を生み出すわけである。

### ③ 経済的隔離

ヘクターによると持続的な経済的隔離がなされる場合にはエスニック集団の凝集力は強まる傾向があるという。アメリカ合衆国においても経済的に最も周縁におかれ、強く隔離されている集団は強い凝集力を示している<sup>30)</sup>。

### ④ 文化的機能

エスニック集団が存続しているのは経済的基礎があるだけではなく、文化的機能を有しているからであるという主張もなされている。

グレイザーとモイニハンはエスニック集団は経済的隔離による経済利害集団であるとともに、文化的要因にもとづいて結びついていることを指摘している。エスニック集団は教会や文化的組織のみならず、病院、老人ホーム、貸し付け基金、慈善協会なども組織する。そこでは自分と類似した人々と共にいる満足感が充足される<sup>31)</sup>。

ゴードンは彼の著書の中で、エスニックの集団形成は経済的利益よりも、文化的要因によるものであると主張している。彼によると文化多元主義は集団の手段的・経済的利益の防衛または増進のため生まれるのではなく、むしろアメリカ化の運動によってひき起される文化的脅威にたいする反応として生まれるものであると主張している<sup>32)</sup>。

## 1) エスニック集団に関するカナダの社会理論

### ① カナダの政治的統一と自律性の保持 (S. D. クラーク)

次にカナダの知的遺産について検討してみよう。エスニック集団の問題についてアメリカとの類似点はカナダもアメリカと同様に移民によって構成された近代産業社会であり、移民は職業的に隔離されて来たため、現在でも多くのマイノリティ集団は労働者階級の地位にとどまっていることである。

アメリカとの相違点として、まずあげられるこ

27) R. K. Merton, *Social Theory and Social Structure*, 1957, PP. 72-82.

28) L. Mayhew, "Ascription in modern societies," *Sociological Inquiry* 38: 2, 1968.

29) A. Cohen, *Urban Ethnicity*, 1974, PP. ix-xxiv.

30) M. Hechter, "The political economy of ethnic change," *American Journal of Sociology*. 79, 5, 1974, PP. 1151-78., "Group formation and the cultural division of labor," *American Journal of Sociology*. 84. 2, 1978, PP. 293-318.

31) N. Glazer and D. P. Moynihan, *Beyond the Melting Pot*, 1963, P. 16.

32) M. Gordon, *Assimilation in American Life*, 1964, PP. 136-137.

とは、アメリカと違って、「カナダ化」の圧力がさほど強くなかったこと、第2に、都市部への移住がアメリカよりも著しかったこと、第3に、カナダにはアメリカの黒人に相当する被抑圧者が存在しない。カナダのフランス系カナダ人は英国系と対等な競争相手である。

このようなことを前提にしたクラークの知見によると、カナダの方がアメリカよりもエスニックの特性が保持され易いと考えられる。カナダもエスニックの絆の解体を促す流動的な社会であり、同化は進行するが、同化は完全になされるものではなく、エスニック・コミュニティは存続していくとみている。

しかも彼はカナダにエスニック・コミュニティがより多く存続する理由を、カナダがアメリカ合衆国に対して自律性を保持しようとする働きに求めている。彼によれば、カナダでは公立学校を除いて、ヨーロッパ移民に対しては同化政策はとられなかった。むしろ移民が母国との絆を保持し続けることによってアメリカ大陸の中でカナダ市民をアメリカ合衆国から文化的に隔離しようとしたわけである。

## ② 「縦のモザイク」(J. ポーター)

ポーターもクラークと同様にカナダはアメリカよりもエスニック集団がより多く存続していると考えている。そしてそれはカナダ社会の「地位と機会」が双方ともアメリカに比べて不平等であるところから生まれるものである。ポーターによると、カナダ社会は社会階級と権力において非常に大きな不平等が存続する社会である。地位の不平等だけでなく、機会も不平等にしか与えられていない。最下層の人々は自からの地位を高める可能性をほとんど持っておらず、頂点にいる人々は彼等の地位は脅かされていない。

カナダの方がアメリカ合衆国よりも権威主義的かつエリート主義国である。人材の補充は階層的移動ではなく、移民の受入れによってなされている。カナダは必要なときには自からの国民を訓練

して養成するのではなく、国外の一層熟練した才能を持つ者を移民として受入れて利用しようとする。

モザイクとはそれぞれの集団がその位置に閉じ込められていることを示している。社会の階層移動率が低いことはエスニックの階層化のシステムが強化されていることである。このようにしてカナダのモザイクはエスニック集団を搾取する手段となっている。アングロサクソン系がエスニシティを賞揚しているのは結局のところ、自己の利益に奉仕しているにすぎない<sup>33)</sup>。

## ③ ポーターに対する批判

ポーターに対する批判は次の二点においてなされて来た。第一の論点は、ポーターが述べているほどには、カナダ社会は閉鎖的でなく、上昇移動が行なわれているという主張である。ブリッシェン、カルバック、リッチモンド、テッパーマンは上昇移動が生じていることを示した<sup>34)</sup>。

ゴールドラストとリッチモンドはトロント市においてエスニック毎に収入を検証し、社会・経済的変数をコントロールしてみると、イタリア、ギリシャ、ポルトガル、アジア系、なども収入が少ないことが判明した。これらのことから推してライツは、カナダはカースト制ではないが、決して平等な国ではないと結論している<sup>35)</sup>。

第二の論点は、ポーターがエスニック・コミュニティの存続の根拠として文化的基礎を否定した点にある。これにたいしてブレトン<sup>36)</sup>は五つの社会的基礎を示した。これをライツは次のように要約している<sup>36)</sup>。

- 1) 適応的： 移民のおかれた社会的状況に対処する
- 2) 表出的： アイデンティティおよび集団所属の感情表現
- 3) イデオロギー的： 主義主張を続け、信念に生きる
- 4) 支配： 経済的支配、政治的支配、資源の支配を求める

33) J. Poter, *The Vertical Mosaic: An Analysis of Social Class and Power in Canada*. 1965.

34) B. R. Blishen, "Social class and opportunity in Canada", *Canadian Review and Anthropology*, 7, 2, 1970.  
W. E. Kalbach, *The Impact of Immigration on Canada's Population*, 1970.

A. H. Richmond, "Social mobility of immigrants in Canada," *Population Studies* 18, 1, 1964, PP. 53-69.

35) L. Tepperman, *Social Mobility in Canada*, 1975, P. 156.

36) J. G. Reitz, *The Survival of Ethnic Groups*, 1980, P. 42.

5) 防御：差別と戦う

これには経済的要因と文化的要因が双方とも含まれているが、そのいずれが重要かの問題については十分検証されているわけではない。

以上、アメリカとカナダの社会理論の遺産は次の理論的スキームにまとめることが出来よう。

1) 適応的機能——エスニック集団の経済的困窮と職場の隔離によって、経済的機能は重要性を増す。シカゴ学派以来の研究成果が示しているように手段的経済的機能はエスニック集団の基礎的条件となる。

2) 文化的・感情表出的機能——生活様式の類似性すなわち宗教、言語、習慣の類似は人々を結びつけ、感情的な充足と安定をもたらす。これもまた手段的経済的機能に劣らず重要なものである。これは適応がすみ生活に余裕が出来、適応機能の必要がなくなった時、むしろ重要となる。

3) 政治的機能——エスニック集団に対して厳しいイデオロギーが存在し、偏見や差別がなされている状況のなかで、これと戦いながら、自己の利益を主張、権益を守るための働きは最も重要なものである。集団の存続意義を理論づけ、これを主張し実現する政治的機能がある。

4) 相互作用・統合機能——第四は成員相互に交流し、連帯を強め、集団の凝集性を高める機能が要請される。そのためエスニック・コミュニティには各種の制度化がなされ、それにもとづく組織が形成される。そしてその中で活発な相互作用

が展開する。このことによってはじめてエスニック・コミュニティの統合は高められる。

(5) 集団凝集性を規定する諸要因

先に述べたように、アメリカのエスニックに関する理論的な研究の基礎を築いたのはM. ゴードンであるが、彼はその著書の中で移民に対するイデオロギーについて「アングロへの同調主義」、「メルテング・ポット」および「文化多元主義」について厳密な考察を加え、その傾向について論じている。さらに同化について詳細に分析し、「文化的同化」と「構造的同化」を区別した。

しかしながらゴードンの関心の中心はあくまで、移民がホスト社会にどのように同化するかに向けられていた。彼の分析はやはりホスト社会に軸足を置いた研究であると見なければならない。またゴードンの分析は一般的に全体としての社会を考察の対象とし、その文化を論じたものであったが、エスニック集団の内部構造に立ち入って経験的な調査研究を行ってはいない。

それに対して次に取り上げるトロント大学のライツは経験的調査を重ねるとともに、エスニック集団の凝集力に注目し、それを規定する要因を究明している。ライツの関心は集団の分析にある。

1) エスニック集団の凝集性

今日、エスニック集団の存続や復活を考えて、その要因を正しく分析するためには、次の手続が必要となる。

まず第1にエスニック集団の凝集力を明確に定義する。第2に、凝集力を判定する方法の開発。第3にそれを凝集力の判定に体系的に応用するというものである<sup>37)</sup>。

まずフェステンガーによると、社会的凝集力の一般的な概念は集団のメンバーを統合する絆であり、メンバーを内部にとどめようとする力であると考えられているので、これはエスニック集団にも適用できるものである。そこで「あるエスニック集団がそのメンバーを長期にわたってその内部にとどめることが出来る能力をもっているとき、そのエスニック集団は凝集力がある」<sup>38)</sup> と言うこ

図1 エスニック集団の機能

A	適応機能 手段的 経済的 (経済的困窮)	G	目標達成機能 政治的 (差別との戦い)
L	型の維持 文化の共有 言語の保持 (帰属意識)	I	統合 相互作用 (連帯の強化)

37) J. G. Reitz, *The Survival of Ethnic Groups*, 1980, P. 91.

38) *Ibid*, P. 92.

とが出来る。

エスニック集団の凝集力とは同じエスニックの系統をもつ人の中で、組織されたエスニック集団のメンバーとしてとどまる人の比率として表す<sup>39)</sup>。

そこでエスニック集団の凝集性と最も関連する特性として「集団所属」があげられる。

2) 集団所属<sup>40)</sup>

集団所属は二つの要素すなわち集団への帰属意識とメンバーとの相互作用に分けられる。

① 帰属意識<sup>41)</sup>

人間は自分を社会との関係において位置づけ、自己イメージを持ち、自己を規定している。自己イメージはパーソナリティの特性群からなっているが、その中には様々な集団への帰属意識が含まれている。その人が移民またはその子孫であればエスニック集団（あるいはホスト社会の集団）にも何程か帰属意識を持つことがあるであろう。集団への帰属意識にはさまざまな程度がある。複数の集団に同時に帰属意識をもつこともある。例えば日系カナダ人が、母国日本への帰属意識をもつと同時にカナダ人としての意識もある。この場合にはどちらに重点を置くかということが問はれる。

② 集団内の相互作用<sup>42)</sup>

集団の成員との持続的な社会的相互作用がある場合には集団に所属しているといえる。ここではエスニック集団の公式または非公式の「ネットワーク」や協同の生活に参加することである。

ところで、先の主観的な帰属感と客観的な相互

作用を組み合わせると四つのメンバーのタイプが構成される。(図2)

(I)の完全メンバーは帰属意識があり、相互作用もしている正規のメンバーである。

(II A)の潜在メンバーは交流はあるが、帰属感のないメンバーであるから、帰属感をもたせることによって正規のメンバーとなる可能性のある人達である。

(II B)の名前だけのメンバーは帰属意識があるにもかかわらず、交流のない人達であるから、交流のチャンスを与えることによって正規のメンバーになる可能性がある。

(III)の非メンバーは帰属感も交流もない人達である。

ライツの調査によると、コミュニティへの愛着を規定する項目間の関係の中では、帰属意識と集団内相互作用の相関が高いことが明らかになっている。しかしエスニック集団の境界は曖昧であり、両者のピアソン相関係数は0.43であり、中程度の相関である。

3) エスニック集団内の結婚<sup>43)</sup>

そもそもマイノリティ集団やエスニック集団への社会的差別が存在する場合には、エスニック集団成員外との結婚の機会はきわめて制約される。したがって仮に外部との結婚を望んだとしても、その実現は困難である。そこでそのような場合にはいや応なしに集団内の結婚に追いやられることになる。

エスニック集団内の結婚によってエスニック集団への帰属感が強まり、相互の親類関係を通し

図2 エスニック集団におけるメンバーの類型

社会的相互作用 \ 帰属意識	集団帰属意識	
	エスニック集団への帰属意識をもつ	エスニック集団への帰属意識がない
同一のエスニック集団員と交流がある	I. 完全メンバー	II A. 潜在的メンバー
同一のエスニック集団員と交流がない	II B. 名前だけのメンバー	III. 非メンバー

39) J. G. Reitz, *The Survival of Ethnic Groups*, 1980, P. 95.

40) *Ibid*, P. 109.

41) *Ibid*, P. 109.

42) *Ibid*, P. 111.

43) *Ibid*, P. 114.

て、相互作用が広がるのは当然のことである。従ってエスニック集団員同士が結婚した場合は同化には時間を要するであろう。

しかしこれまで存在した社会的差別が減少したり、解消すると、エスニック集団外との結婚率は高まって来る。たとえば、日系人も差別が強かった戦前・中は勿論、1970年代中頃までは族内結婚がほとんどであったが、日系に対する圧力が衰え、また日本の国際的地位が高まった1970年代後半に入るとカナダ・トロント周辺の日系人の3世、4世では日系人以外との結婚が増加し、いまや50%にも達している。

いずれにしても集団内の結婚が集団所属に強い影響を与えることは当然のことと考えられる。

#### 4) エスニック言語の保持<sup>44)</sup>

エスニック文化の中核は言語である。したがってエスニック文化に関心を持つ者は当然その言語に関心を寄せる。エスニック言語を保持している人はこれを使用し、また子供達にも伝えようとする。あるいは2世でエスニック言語を使えない人の場合にも3世に学ばせようとすることもある。エスニックの復活によって一度離れたエスニック文化に再び関心を寄せることも起っている。

さらに日系人の場合には第2次大戦中から戦後にかけて弾圧されたために、日系文化を捨てて、日本語を知っていても話せなかったが、戦後、日本の経済成長にもなって日系企業が進出し、雇用の機会が生まれたため、3世や4世のなかに日系企業に就職する目的で、日本文化に親しみ、日本語を学ぶ人も多くなって来た。

エスニック言語の保持が集団所属を強め帰属意識を高めることは、当然、考えられるところである。

#### 5) 居住地の隔離<sup>45)</sup>

エスニック集団員が特定地域に集住しエスニック・タウンを形成している場合には、当然、母国語を話し、母国語の新聞を読み、相互作用を行うから、帰属意識も高まる。従って、従来、同化主義の立場から、隔離したエスニック・コミュニテ

ィは同化を妨げるものと考えられ、解体すべきものとされていた。しかし1960年代後半から、文化多元主義の考えが一般化するにもなって隔離された居住地にも寛容なまなざしが向けられるようになって来た。

日系カナダ人の場合には戦前にはバンクーバーのリトル・トーキョウやステイブストンに集住していたが、戦時中にキャンプに収容され、東部へ強制移動させられ、分散居住を勧められたところから、トロントにおいても集住せず分散居住している。トロントで集住し、エスニック・タウンを形成しているのは中国系、ポルトガル系、ユダヤ系、イタリア系、韓国系などである。

#### 6) エスニック系教会への参加<sup>46)</sup>

宗教は個人にとって窮極の価値であるところから、エスニック系の教会への参加はエスニック集団の他の成員との絆を強め、帰属意識を高めていくことは疑い得ないところである。ユダヤ系がなかなか完全には同化しないでまとまっているのは独自の教会への帰属が強いからである。強固な連帯性を持つマイノリティはいずれもエスニックの教会を持っていることが多い。

日系カナダ人は移住の初期から仏教会を維持して来たが、同時に日系キリスト(合同)教会が存在する。仏教会と日系合同教会のメンバーの数はほぼ均衡している。

#### 7) 集団所属と諸要因との相関関係<sup>47)</sup>

ライツ等は集団所属に対して四つの要因(内婚、コミュニティ内居住、エスニック言語保持、エスニック系宗教)との相関係数を調査データを用いて計量した(表8、図3)。

これによると、まず集団所属の二要因のうち集団内相互作用の方が他の四つの要因とより強い関連性をもっていることが判明した。これは特別な態度をもつことよりも、エスニック・コミュニティの生活に実際に参加することの方が集団の内的結合を強めていることを示している。

また集団所属の二指標は「エスニックの言語保持」と最も強い相関を示し、逆に「内婚」と「コ

44) J. G. Reitz, *The Survival of Ethnic Groups*, 1980, P. 114.

45) *Ibid.*, P. 115.

46) *Ibid.*, P. 115.

47) *Ibid.*, PP. 115-119.



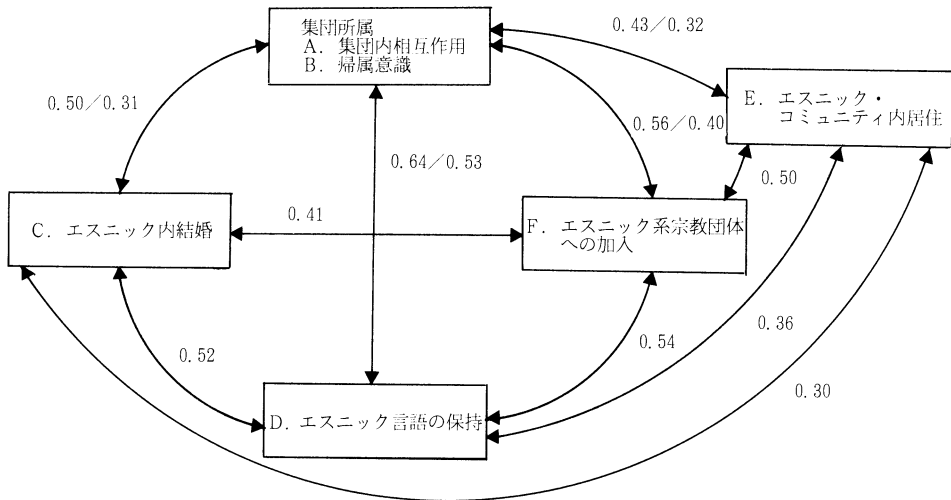
表 8 民族コミュニティへの愛着に関する項目間の内相関（ピアソン相関係数）

(WN, 000 ; N)

項目	A	B	C	D	E	F
A. 集団内相互作用	1.00					
B. エスニック集団への帰属意識	1.46 (1,306; 2361)	1.00				
C. エスニック内結婚	0.50 (1,330; 2387)	0.31 (1,292; 2315)	1.00			
D. エスニック言語の保持	0.64 (1,344; 2433)	0.53 (1,306; 2361)	0.52 (1,330; 2361)	1.00		
E. エスニック・コミュニティ内居住	0.43 (1,344; 2433)	0.32 (1,306; 2361)	0.30 (1,330; 2387)	0.36 (1,344; 2433)	1.00	
F. エスニック系教会への加入	0.56 (1,343; 2431)	0.40 (1,306; 2359)	0.41 (1,330; 2385)	0.54 (1,343; 2431)	0.50 (1,343; 2431)	1.00

(出所) J. G. Reitz, *The Survival of Ethnic Groups*, 1980, p. 116.

図 3 (表 8 の図式化)



コミュニティ居住」とは最低の相関を示している。これは言語の保持がエスニック集団の凝集力を最も反映する文化特性だからであろう、とライツは見ている。集団帰属とコミュニティ内の居住との関係は最も弱い。「言語の保持」は「内婚」と「エスニック教会」の双方と強く相関している。

この結果、ライツは「言語の保持」が重要とみている。

**むすび**——エスニック集団の諸特性

最後にライツの調査データを利用しながらカナダのエスニック集団を四つのエスニック系に分けてその諸相を総括しておこう。

表9 カナダ・エスニック集団の諸相

	エスニック集団の制度の普及度									⑩ 総合集力
	⑩ エスニック 社交クラブ	⑪ "	⑫ "	⑬ "	⑭ "	⑮ "	⑯ "	⑰ 医療 サービス	⑱ エスニック 職場	
北ヨーロッパ系 (ドイツ・オランダ) (スカンジナビア)	三位 (8.2)	三位 (21.6)	四位 (16.8)	四位 (14.2)	四位 (1.7)	四位 (8.1)	四位 (4.7)	四位 (7.4)	四位 (6.6)	最も弱い
東ヨーロッパ系 (ウクライナ) (ポーランド) (ハンガリア)	二位 (9.5)	二位 (40.5)	三位 (21.1)	三位 (16.1)	三位 (4.2)	一位 (28.2)	三位 (7.8)	三位 (14.6)	三位 (13.9)	弱い
南ヨーロッパ系 (イタリア) (ギリシア) (ポルトガル)	四位 (7.9)	一位 (57.9)	二位 (24.2)	一位 (36.6)	一位 (27.3)	三位 (24.5)	一位 (44.9)	二位 (34.1)	二位 (30.8)	強い
中国系	一位 (13.9)	四位 (21.4)	一位 (33.6)	一位 (16.6)	一位 (17.8)	一位 (24.7)	一位 (36.9)	一位 (37.8)	一位 (34.3)	強い
① 入国の時期	古い	古い	新しい	新しい	第二次大戦後が多い	第二次大戦後が多い				
② 入国時の職業	農業	農業、都市	季節労働 都市、建設業	戦後、技術専門職 戦前、鉄道建設労働						
③ 仕事の地位	一位 (43.0)	一位 (43.0)	三位 (40.6)	一位 (41.7)						
④ 仕事の隔離	なし、少ない	いくらか	強い	強い						
⑤ 所得 (教育と仕事地位を修正)	一位 12,300 ドル	三位 11,500 ドル	二位 11,700 ドル	三位 11,500 ドル						
⑥ 所得 (教育と職場を修正)	一位 12,100 ドル	一位 11,700 ドル	三位 11,600 ドル	四位 11,200 ドル						
⑦ 教育年数	三位 (11.6)	二位 (12.0)	四位 (10.0)	一位 (13.2)						
⑧ 相互作用	四位 (31.5)	三位 (48.6)	二位 (77.5)	一位 (79.5)						
⑨ 帰属意識	四位 (30.0)	三位 (38.6)	二位 (71.3)	一位 (82.2)						

注 数字はライッツによる指数

## 1, 2) 入国の時期と入国後の職業

「北ヨーロッパ系」は入国の時期は古く、職業は主に農業であった。

「東ヨーロッパ系」も入国の時期は古く、大部分は農業に従事していた。

「南ヨーロッパ系」ことにイタリア系は第二次大戦後が多く、都市に多く住み、小商店や屋台を引いたりする人が多く、また建設業に進出した人も多い。さらに季節労働者としてカナダとイタリアを往復した人も多かった。

「中国系」は最初、鉄道建設に従事したが強く排斥されたため、各種の都市の雑業に従事したが数は少ない。大多数は第二次大戦後に主に香港から移住したもので比較的新らしい。

## 3, 4) 仕事の地位と隔離

「北ヨーロッパ系」は仕事の地位は最も高く、仕事の隔離は最も少ない。もっとも同化が進んでいる。

「東ヨーロッパ系」は、仕事の地位は北ヨーロッパと並んで高いが、仕事については若干の隔離が残っている。

「南ヨーロッパ系」は、仕事の地位は最も低く、逆に仕事の隔離は最も大きい。

「中国系」は仕事の地位は北・東ヨーロッパについて2位であり、南ヨーロッパより上位であるが、仕事の隔離もなされている。

## 5, 6) 所得

「北ヨーロッパ系」は「教育レベルと仕事の地位」を修正した場合も、「教育レベルと職場」を修正した場合もともに最高の所得を得ている。

「東ヨーロッパ系」の所得は「教育と職場」を修正した場合は2位であるが、「教育と仕事の地位」を修正した場合には3位となっている。

「南ヨーロッパ系」の所得は「東ヨーロッパ系」とは逆に「教育と仕事」を修正した場合には2位で、「教育と職場を修正」した場合には3位となっている。

両者を総合すると「東ヨーロッパ系」と「南ヨーロッパ系」の所得はほとんど同じレベルであると言えよう。

「中国系」の所得は双方とも最低である。

## 7) 教育年数 (カナダで育った者)

「北ヨーロッパ系」ではカナダで育った者の教

育年数は「中国系」、「東ヨーロッパ系」について第3位である。

「東ヨーロッパ系」のカナダで育った者の教育年数は中国系について2位である。

「南ヨーロッパ系」の教育年数は四つのエスニックの中で最も短い。

中国系の教育年数は四者の中で第1位である。

## 8) 相互作用

エスニック集団との相互作用についてライツの指数によると、1位「中国系」、2位「南ヨーロッパ系」、3位「東ヨーロッパ系」、4位「北ヨーロッパ系」となっている。

## 9) 帰属意識

エスニック集団への帰属意識についてみると、相互作用と同じく、1位「中国系」、2位「南ヨーロッパ系」、3位「東ヨーロッパ系」、4位「北ヨーロッパ系」となっている。

## 10~18) エスニックの制度の普及度

社交クラブの他、七つのコミュニティの制度の普及や参加についてみると、「北ヨーロッパ系」においてはエスニック新聞など七つは4位で、残りの二つは3位である。総合すると四者の中では最低であるといえる。

「東ヨーロッパ系」では、六つは3位で残り三つが2位となっている。したがって総合すると3位になる。

「南ヨーロッパ系」は1位が四つ、2位が三つ、3位が一つ、4位も一つとなっている。

「中国系」は1位が四つ、2位が四つ、4位が一つである。以上を総合するとエスニック制度の普及は南ヨーロッパ系と中国系はほとんど差がなく、いずれも1位と考えられる。

## 19) 凝集力

最後に全体を総合して集団の凝集力をみると「南ヨーロッパ系」と「中国系」が同程度に強く、「東ヨーロッパ」がこれにくらべると弱く、「北ヨーロッパ」は最も弱いと評定することが出来る。